

日本映画オーラル・ヒストリー・プロジェクト

齊 藤 綾 子
ローランド・ドメーゲ
門 間 貴 志

「日本映画オーラル・ヒストリー・プロジェクト」は、日本映画の分野に携わってきた方々にインタビューを行い、口述資料として収集・保存することを目的に、言語文化研究所の活動の一環として芸術学部の映像研究の教員が中心となり計画され、第一回として映画プロデューサーの田口寧さん（『言語文化』三三二号）、第二回として映画監督の篠田正浩さん（『言語文化』三三三号）のインタビューを掲載した。今回掲載する第三弾は徳島県美馬郡つるぎ町にて、長年にわたり貞光劇場を運営されてこられた藤本一二三さんのインタビューである。

古い映画館が続々と消えていく昨今、日本映画の全盛期の映画興行に関する証言が、将来ますます重要度を高めていくだろうとの思いから、今回は映画興行師を選んだ。映画館および映画興行は、近年、日本でも注目を集めつつある研究テーマとなっている。映画館への学術的、社会的な関心が、近年の日本でも高まりをみせている背景には、都市と地方で同時並行的に、「ミニシアター」「名画座」等の独立系映画館

が閉館し、その存在が失われているという状況がある。そうした関心の高まりにもかかわらず、この分野に関する先行研究が、日本で必ずしも蓄積されていない要因として、興行関連の非公刊のノン・フィルム資料が、既存のフィルム・アーカイブ等において保存の対象になりにくく、分析すべき一次資料の整理調査が不足しているという課題が存在している。このことを鑑み、今回インタビューした藤本さんの追想談は貴重な証言となっている。

なお、ここで公開するオーラル・ヒストリーは、あくまでも語り手が個々の記憶にもとづいて口述した歴史である。方言のままなので読みづらい所もあるかもしれないが、「記憶を歴史にする」というオーラル・ヒストリーの主旨にもとづいて語り手の発言を尊重することを読者諸氏にはご理解いただければ幸いである。

日本映画オール・ヒストリー 第三回 「藤本一二三」^{ひふみ}

聞き手

ローランド・ドマーニグ（明治学院大学准教授）
スザンネ・シエアマン（明治大学教授）

上田 学（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）

■戦前の貞光劇場

—— 藤本さんは山田洋次さんと同じ年に生まれたんですか？

藤本 同じ年。ほやで馬が合うねん。会った瞬間から。

—— 昭和六年（一九三二）ですよ。

藤本 昭和六年。

—— 貞光劇場が開館したのは、その翌年の昭和七年（一九三三）ですね。

藤本 はい。

—— 子供のころから常にこういう劇場があって、育てられたわけですね。

藤本 そうそう。（写真を見ながら）これだってね、劇場の中で、私は何歳ぐらいだったろうか。劇場の中で寝てね、それで私が寝とるのを知らんもんじゃけん、従業員もそのまま戸締まりして往んでしもた。それで、私が「おらん」「おらん」言うて、家の人が捜したって、そしたら劇場で私が寝よったって（笑）。それぐらいもう劇場の中に馴染んでしもうとんねん（笑）。

—— 一番最初は演劇の劇場として開館されたんですね。

藤本 そうさね、演劇じゃね。演劇でもいろいろしたんですよ。浪曲な、漫才な、歌舞伎、それから、何でもしたことあるんですよ。あれ、梶原というんかな、あれ何ていうんかな。露天商みたいのが大勢集まってこうするやつ。

—— ヴァラエティ的なもの？

藤本 梶原というんでちゃうな。何とか言うね。サーカス。サーカスまではいかんけどな。そんなんしたことあんねんで。あの舞台にね、車を入れたことあるんですよ。自動車。それで、何したかといったらね、花道あつたら、花道を通らんで、横へ付けてね、それでその車を上げてね、その舞台でな、それを口で引っ張るといふやつをした。そんな芸当をした。戦前はそんなんがあつた。

—— この劇場は、この地域、貞光で初めての劇場だったのですか。その前にも劇場があつたのですか？¹

藤本 その前は、私は記憶がないね。

—— ここに來た劇団というのは地元の劇団ですか？

藤本 地元です。ここには春子太夫というのとね、それから、もう一つ何かという、地元のやつやね。その春子太夫というのは、徳島に石井という町があるわね。その出身の人だった。よう受けたんですよ。というのは、歌舞伎でいつも男の人が女優をしよって、こう、尻まくりというのがある。歌舞伎であるんですよ。こう尻をぱつとまくってな、それで膝を組む。石川

五右衛門という、知りませんか？

—— 五右衛門は分かります。

藤本 そういう役をする人がね、徳島の石井にね、劇団をつくつたの。それはもう戦前じゃわね。戦後は来なんです。春子太夫といつてね、よう受けとつたんです。それはもう正月とか盆とか、その人がやつぱり来よつた。

—— それは徳島の中で活躍されていた劇団ですね。そのほかに例えば大阪とか、京都とかの劇団が巡回していましたか？

藤本 ああ、巡回するやつも来たのは来たわね。うちに入つてみたら木の額があるね。その額を見たら、昭和七年、八年、九年ごろによそから来たやつを額を書いとるのがありますわ。それは有名なが来てますよ。春野百合子²とか、もう一つ何とかいうのがある。

—— 戦前の貞光劇場は芝居小屋で、演劇が中心でしたが、映画も上映しましたか？

藤本 映画は少ない。映画は無声映画だったけんな。無声映画では動員がでけん。

—— ではその弁士さんもよそから来て。

藤本 無声映画をしよつた。九州の人ですわ。あれは遅うまでしよつたですわ。私が汽車に乗って行つたときにも、そこにあつたん知つとるぐらいじゃけ。私は大きくなつとるわな。そこがうちへ売り付けに來た。

■青春時代と父親の経営時代

—— ちよつと確認したいのですが。この『昭和三十一年版全国映画興行配給業界紳士録』（一九五六年）に載っている方は、多分お父さんだと思います。

藤本 藤本伝助。うちのおやじ。

—— もともと貞光の牧場主だったと書いてあるのですが、藤本 うちのおやじはね、映画は無頓着。それで他人任せで、私が学校に上がってからな、私が主役になった。伝助は名前だけで。牧場というのはね、うちのおやじがこっちの山の出身。本当に若くしてね、こう言うたら怒られるけど、無学の方で勉強もせずにな、一生懸命に働いた人。それで、こういう牧場とというのは、こっちに美馬橋という橋があるでしょう。貞光川から河川敷を全部県知事の前菊太郎が買ってね、うちが占有したの、ごく最近まで。昭和何年だろうか。だいぶうちが権利持ったんですよ。その権利、私が建設省へ戻した。県がこの川の権利を持ったんですよ。それをそのときに建設省に取り上げた。県に許可証を取り上げられた。ただみたいに取り上げられた。国が取り上げるちゅうだけん。だから、それまで県が持った河川敷の力を。吉野川も皆、建設省が、管理するようになった。だから今は国になつとるんですよ。

—— お父さまは映画に関心なかったのですか？

藤本 なかった。うちが牧場しよったんでな、牛をようけ飼いよったんですよ。そうしたら、牛の飼料として河川敷の草を刈らないかん。それで権利をもうてね、牛をようけ飼いよった。

—— なぜお父さんは劇場を造ったのですか？ つまり牧場だけ経営していれば。

藤本 これはね、うちのおやじとね、津司さんという人が共同で造った。敷地はみんなうちのおやじが手に入れた。うちのおやじと、その前のオオモトさんという、うちのおやじの兄弟が養子に行ったところの人で、その家の人が持った。それをおやじが回収した。それでうちのおやじが土地を持ったけん、場所はここがええだろうというんで造った。

そやけど、うちのおやじは映画には関心がなかった。というのは、牧場や農業というのは頭は別に使わんでええやないですか。こう言いよったら、農業や牛飼いよる人らに怒られるけどもな、大体が牛なら牛を大事にしてやりや、飼料やつてやりや、牛は大きくなる。ほんじゃけん、あそこであちのおやじは牧場、それから、竹林というのが、あそこ竹があつたんですよ、河川敷全体。それは町が持った。それをうちのおやじが買ったりしてね。竹の商売もしとる。そして、この辺はみんな桑地で、この劇場から向こうは全部桑地。今は町になった。貞光は桑地の町。カイコ、製糸があつたんですよ。貞光は製糸で生活をしとった。

—— カイコの町は裕福だったという印象があるのですが。

藤本 脇町も製糸があった。筒井製絲。貞光は何とか製糸というのがあったんですよ。製糸はみんなつぶれたけどね。筒井もつぶれたけどね、私がいいたときは筒井製絲はあった。今はキョーエイさんとか何とかというスーパーがでてるでしょう。私が行ったときは、製糸があった。あの町は私が行ってからできたんだ。それまで町はなかった。私が脇町に行きよったときは、竹やぶの淵を通って行きよった。だから、脇町に関して私は一番よう分かる。中学校の十代から脇町からだいたい十キロ歩いたり、汽車で行って、あの付近から歩いたりしたんで。私は脇町から土曜日は歩いてますけん、高校の一年、二年のときは。脇町から歩いて戻って来よったんですよ。というのは、土曜日は汽車がなかった。朝八時に行ったらね、帰りは四時半まで汽車がない。土曜日は昼で終わるでしょう。四時まで待たないかん。私はあの遠い所から歩いて戻って来よった。それで三年くらいになって、汽車が一時ごろもできた。汽車がなかった（笑）。

—— 学生のころ、学校でも頻繁に映画上映会がありましたか？

藤本 それはなかったよ。私が中学校のときは全然なかった。

■無声映画の上映について

—— 子供のころに、映画を観る機会は、貞光でもあったのですか？

藤本 私の頭の中にあるのはな、無声映画。その無声映画というのはどんながあったかというところ、こつちに弁士がおるんですよ。机置いて。それで、そつちに楽団の人がおるんですよ。唯す人が。それでこつちで無声で映写機を廻す。そうしたら、こつちの人、弁士が画面を見て、それで台本というのがあって、それ見ながら泣くところは泣いたりしてこうするん。それで早くする、駆け足みたいになつたら映写機が早く回る。それに合わせて弁士がやる。

—— それは、ここ貞光での無声映画上映会の記憶ですか。それとも、徳島の市内やどこかで無声映画を観た記憶ですか。

藤本 私はここでしたのを言いよんのよ。徳島では観たことない。徳島でも無声映画というものは戦後もあったんですよ。その無声映画をしよった人が駄目になって、高知か九州か引き揚げていった。そのときにうちに売り込みがあったんですよ。その館を買わんかと言うて。というのはうちが売れとったけん。地方でも残っててもな、残ると思つて売り込みに来た。それが無声映画のね、わし、台本を持つとったんや。その台本ね、今のこの、骨董品を開いたら人にな、その人に見せたら

「売ってくれ」「売ってくれ」と言って、私が去年かしら売った台本、文部省の印を押して。それは『瀧の白糸』（一九三三年）かな。有名でしょう。その台本だけあった。それでフィルムはね、私は『瀧の白糸』と思ったんだ。そのフィルム。そうしたら、徳島新聞の人でな、出身が関大か知らんでな、関大の先生がそういうのを捜しよるといふ。「ほな藤本さん、関大の先生がおるけんな、それ見せてくれるだろ」と言うんや。そうしたら、私は見てみなんだらな。それで見てみたら、台本は『瀧の白糸』だったけどな、フィルムが違ふんよ。今でもあるけどな。台本とフィルムが違ふ。

というのは、私ね、うちに買ったときにそのフィルムも来とったと思う。またそれね、戦後、うちが買ってからね、鴨島に岩本さんという人があったんよ。その人がね、十六ミリの映写機も私が買うとつたけん。それが徳島で遅うまであった、昭和三〇年の初めぐらいまでか、無声映画のな。徳島の新町橋あるでしょう。あれを渡ってこっちにあった。無声映画館というのが、専門で⁴。もう人気があったんですよ。そやけど、それが始末していくときに、うちに売りに来た。映写機とフィルムと台本や。それで買うとつたのを、また鴨島の岩本というのが来てね、その十六ミリの映写機を売ってくれて。それでフィルムを付けて売ってくれと言って、そのフィルムを付けたのは、台本とフィルムとが違ふて。

—— では戦後もまだ無声映画だけをやってる映画館が

あったのですか？

藤本 あったんですよ。徳島にあったんですよ。無声映画はあったんですよ。それが引き揚げていくときにな、うちにいろいろな資料を売り付けて、九州かしら行ったんだよ。

■映画への目覚め

—— 藤本さんが映画に魅了されたのはいつごろですか？戦後になってからですか。

藤本 私が高校を卒業したのは昭和二五年かな、二四年にね、『青い山脈』（一九四九年）という映画があった。誰だったかな。今井正監督、池部良と原節子主演か。あれは私、昭和二四年に、うちの劇場でなしに、封切館、徳島まで行って観た。感動を受けたね。私はあれには涙が出た。ええ映画だったけんね。それで二五年に私、高校を卒業したでしょう。こりや映画がいつて。おやじは「おまえ大学行かんのか」と、「いや、大学行かん。私は映画にすぐ行く」と。二四年に、学区制になってね、川向こうは脇町高校、川のこっちは穴吹高校と分けられた。穴吹は女子高だった。脇町は男子校。それで戦後、初めて男女共学というのができたんですよ。そのためには女子の方に男子が行かないかんでしょう。脇町から行かないかんでしょう。だから、私は穴吹高校に一年行った。穴吹高校第一回生。脇町高校第二

回生。私がおるときに高校ができたけん。だから、両方の卒業生。だから、寄付のことが来たらね、第一期生の穴吹高校から寄付、それで第二回の脇町高校から寄付、両方から来る。うちの子供もね、次女は脇町、長女は穴吹に行った。穴吹に行ったら英語科があつてな。次女の方は理系の方がいいけん、薬剤師になるけんと脇町に行った。両方から来るんですよ(笑)。

——昭和二四年に『青い山脈』が大ヒットして、昔の映画年鑑によると、その年に貞光劇場が映画館としてスタートしたと記録されているのですが。

藤本 いや、映画はもっと前からしよつたよ。昭和二〇年ごろからね。『君の名は』(大庭秀雄監督、一九五三年)とかな。

■ 映写技師の免許取得

藤本 私が二五年に高校を上がつて、すぐに映画館に入ったですよ。ほんじゃけん、二五年に私、あのころは映写技師の免許が要つた。国の。私も持つとるけん、見せてあげますわ。(資料を取り出す)これは一級と二級があるけん、これは一級の免許を取つた。徳島で受けた。それで、労働基準局がくれよつた。

——その免許を取るには、どのぐらいかかったのですか? そういう訓練とか。

藤本 うちので慣れてるでしょう。そうしたら徳島の封切館で試験官がおるんですよ。それで、その人がね、「はい、時間で、行きますよ。はい、フィルムかけて映して」つて、こう映すんだ。それで、その動作を見よつて、「よろしい」と。それで、学科試験があります。学科試験が。それで通るか通らんかが決まつて、後から通知が来る。

——すぐ取れたわけですね。

藤本 取れた。一発でいった。

——ご自分の劇場で訓練しましたか?

藤本 そうそう、訓練してね。うちの劇場に前、香川県の何とか劇場で、一流どころでね、無声映画のところから来よつた技師さんがおつたんですよ。ヒラマツとかいう人が。うちの劇場が機械を作つてししたら、ちよつとの間、その人が教えるにきてくれた。その後また貞光の出身の人で、徳島の何とか封切館にいた人が私を教えてくれたよ。それで、よかつたのはね、その貞光の出身の人が徳島の封切館に支配人でおつた。「藤本さん、前の日に来ない?」と、「教えてあげるけん」。そうしたら、泊まりがけで行つて、その人がその試験する映写機で、うちの映写機と向こうの映写機は違うでしょう。迷う。皆、びつくりしてでけんね。そやけど私は前の日泊まり込みで行つてからね、試験官がびつくりしてる。大体みんな初めてで、私は一人だけ知らん顔して始めてな、それではっばっばとこうやった。そうしたらびつくりしてるの、試験官。どうしたの、

こんなふうまい。それではつばつぱつとして、ぱーとしたらな、「はい、よろしい」って(笑)。

ここの出身者の映写技師が二人おったんよ。一人は徳島の鴨島の封切館におって、その人が体を悪くして貞光に戻ってきた。それでうちに來てくれて、すぐ死んだけどな。教えてくれた。そうしたら、今度は徳島のな、こつからまた徳島、ジョウトクさんという人が徳島の封切館におったんや。それで、その人が「そこで試験するけん、藤本さん來てな、教えてあげるけん。泊まり込みで來ない？」と。

—— 最初、ここで映画を上映するようになったとき、自分で映写技師を務めたのですか？

藤本 そうそう。

—— 映写機はいつ？

藤本 うちには買うてありました。「君の名は」をすることに買った。大阪にね、映写機屋がおってね、そこで買った。武仲さん⁷。こんなものじつと置いとつてもな、値打ちがないねん(笑)。

■貞光劇場の経営者に

—— これも昔の映画年鑑の資料なのですが、一九六一年に初めて藤本一二三さんが責任者として名前が出てくるのです。

六〇年まで、オーナーはお父さんの藤本伝助ですが、もう一人、藤本茂という支配人がいます⁸。

藤本 それはいつときだけ。これはもう済んだことじゃけん。税金の関係。茂さんは義理の兄、私の姉の婿だった。というのはね、そこには子供が大勢おった。あれを引く申請して、扶養家族を引くでしょう。そうしたら、その人には子供が五人ぐらいおったんや。そうしたら、わが夫婦で七人もなるでしょう。そうしたら税金がかからん。そんなので、これは名前だけだったんで、これの。そうしたら税務署の申告で怒られた。実際は藤本がしとるで言うて怒られた。

—— それは一九五〇年代でも実際には藤本さんがやっていたのですか？

藤本 そう、この人はせえへん。

—— 記録の上ではお父さんと。

藤本 おやじが許可をもらてずつと営業しよった。営業の名前。私らがしたつて別にかまわへんの。だから、うちのおやじが死んだら、おやじは昭和五十何年に死んだ。それまでずつとおやじの名前で私がしよった。それで、税務署に言われたんや。「藤本さん、名前も変えないかん」と、「へえ、すんまへん」と、それで私の名前に変えたんや。

■貞光劇場の観客

—— 今、貞光はつるぎ町になっていますが、戦前の劇場ができたころ、貞光の人口はどのぐらいだったのですか？

藤本 人口は六千ぐらい。

—— それで、大体劇場に來た人は、貞光の地元の人の中心だったのですか？ 周りの町からも來たのですか？

藤本 違うんですよ。山田洋次さんの映画祭をしてもね、百人入るとしたら、八〇まではよその人。貞光は二〇、そんなです。どの辺の人が來るかといったらね、川向^{こゑむか}この郡里に、うちがしよった郡里劇場があつた。その町の人。それから合併してつるぎ町^{つるぎまち}になったとるけど、半田の人。その向^{むか}こは東美好^{ひがし}になつとる三加茂^{みかも}の人。それで、その川向^{こゑむか}この三野^{みの}。これだけの範囲から來たんで、よその人がようけ來よる。

—— それは昔からそうだったのですか？

藤本 それは昔からそうです。東からは來ない。それというのは、向^{むか}こは私は文化の町言うねん。大きな町やと。うちは六千で、向^{むか}こは一万かなつとるやろ。違うわけや。あそこの高等学校、私もあそこの高等学校にお世話になったんや。あそこ五年もいたんで。向^{むか}こは、まあいうたら偉ぶつとるわけやな。ほんじゃけん、町民もそういう感じで全然來なんだ。私は両方で出しとるから分かるんじゃけん。全然來んな。それ

はね、おかしいもん。そやけんどやね、売上げは貞光が十万だつたら、あそこは三万ぐらい上がる。

ただ、あそこで貞光に勝つたのはね、吉永小百合の『愛と死をみつめて』（斎藤武市監督、一九六四年）か。あれは内容がね、ちよつと高尚なんですけどな。あれはものすごい入った。これはね、おかしいもんですよ。許可映画というもんがなかったら子供は入れなんだ。それで『愛と死をみつめて』だったら、大体小学校の生徒は観るもんでないと思うでしょう。中学校や、まあ高校の上やと思うでしょう。違うんですよ。私はあれはびつくりした。私が脇町劇場で座つとつたらな¹⁰、切符売り場で。そうしたら、いつもいる先生がね、「藤本さん、もう『ドラえもん』とか『ゴジラ』やいうんはな、もう子供は席を立つた」って言うんじやつて。「ああいうもん観せてくれと言ふ、『愛と死をみつめて』は許可するけん」と。私はそんな許可するなんて思つてない。逆らえへん。「そうですか、先生」。そうしたら、入場料は五〇円だった、あのとき。「この映画高いけん、先生、七〇円にしてよ」と、「藤本さん、七〇円高いな」「ほんならまあどうにも」と、「藤本さん、七〇円で許可したけん」と。ようけ來ました。

それで、私の友人がね、江原中学校で先生しよるのがおる。江原中学はうちの劇場から、脇町劇場からだつたら四キロある。今、高校、中学生やつたら自転車でしょう。当時は歩いて來たんだよ。それが日曜日なんや。ノノムラという私の友人が、

脇町中学の同級生がね、「藤本さん、久しぶりじゃなあ。わしな、『愛と死をみつめて』は生徒連れて行くけん」と言うんや。「ほー、遠いのに来るんか、おまえ。いつや？」と言ったら、日曜日。「へー」と、「ほんなら、待ちよるけん」と。何ぼ来たと思います？ 三百名。映画してから、これがもう私の一生の思い出。「へー、四キロもあるよ、あれ」と、歩いて来た。私はそれにびつくりした。もう涙が出た。その友人がな、当時な、それも歩いてですよ。今の中学校やったら皆すぐに車でさーっと来るやろ。それを歩いて、三百名もよう連れて来たわと思って。もうそれには感謝した。私は大大感謝や。

■貞光劇場の定員数

—— 定員数というのも書いてあるのですが、この六五〇人定員というのは？ 多分大きさは変わっていないと思うのですが、六百人も入れたのでしょうか？

藤本 それは上と二階とあるけ。

—— これは立見席があつたのですか？

藤本 そうね。二階というののも何ぼ入るか分からんですよ。下というのは決まるけどね、二階というのは畳でしょう。それで、通路は板間でしょう。何ぼでもOK。普通三百、ということとは、あれは大きな定員にしようたらな、規則があつてね、規

則が難しい。だから、ところでは少ないやつに言うて、ところでは高い方で、普通三百人の定員と書いてあると思う。

—— 六五〇人というのはすごいですね。

藤本 いや、それが心配。ナイトショーというのがはやつたんです。戦後。八時から一回というのが。それで、十円で一万円上がったってどういうこと。千人でしょう。とにかく入れに入れ。そうしたらね、二階だったら手すりのところだけは観えるんだね。後ろになつたら観えませんが変でしょう。観えるはずがないんで。それでもはめるだけめとつたらな、順番に観えるけん。それで、皆がな、「貞光劇場は二階が落ちる、落ちる」と。二階が落ちるのじゃない。お客さんが落ちるんだ(笑)。反対やつて。「劇場が落ちる。落ちる」と言つて警察が来てな、「二階が落ちる、落ちるとやかましいんじや。おまえ、ようけ入れたらいかんぞ」と。二階が落ちるんじやないんで、お客さんが落ちるんで。

—— そういう事故があつたのですか？ 実際にお客さんが落ちたという。

藤本 そんなん全然ない。ないけんどな、お客さん波打つんですから。後ろの人は。このぞき見をするやろ。ほんなら、こう真正面でしょう。二階の横の方の人だったら観えんの、まともにこう観たらな。ほんじやけん、こう前に寄つて観ると。

—— 危ないですね、一番前は。

藤本 危ない、危ない。

—— なるほど。落ちるという話が出てきて。

藤本 そうそう。それで、みんな一般の人や何やわな。うちの映画祭というのが昭和六〇年ごろから山田洋次さんでしたでしょう。五く六年。そうしたら、「落ちる。落ちる」言うけん、「二階は上げんよな」「うん、上げへんで」言うて、それで百人に決めるかと、二階は百人に決めとった。それで、下は三百とかいうてな、平均三百でいっとった。

■貞光周辺の映画館

—— 一九五〇年代は日本映画の最盛期で、まだテレビが普及するまではやはり人が映画館に観に行ったのですね？

藤本 映画というのはね、昭和三〇年前後にテレビが出たでしょう。それで落ちてしまった。これは激しい。この美馬郡には映画館が十館あったんですよ。それが三〇年前後にテレビが出たでしょう。昭和四〇年まで私がやっていたところだけが残ってみんなつぶれた。全部。

—— 昭和三〇年にもう一つ貞光会館という劇場がありましたね？

藤本 会館があったんですよ。これが問題。これはうちが手広くするでしょう。はやるというんで貞光会館というのができた。それは昭和三〇年ぐらいで、昭和四〇年でなくなつた。そ

れは株主が十人ぐらいで、十人というのは貞光の錢持ちばっかり、それがうちに対抗して集まつた。それが大垣さんという土建屋さんが先取りで、それで、今でも長者番付に入っている村雲さん、今は違うことしやるけんどな、この人らが入って十人ぐらいで始めた。それが三く四年しても入らんで、内輪もめしてやめてしもてな、あと一人大垣さんだけが残つた。その大垣さんもしまいに半田会館というところを一つ造つたんだよ。土建屋さんじゃけん、建物を造つて、それで同様に始めた。それが駄目で半田会館は参つた。それで貞光会館が残つて、それも駄目になつてね、しまいはどうだったのか。火災が起こつた。それが問題。火災が起こつてね、警察やら消防がうちに調べにきたんや。「こういうところが火災が出るんだよ。藤本さん、火災起こるね」と、「いや、あれはコンクリの中にあるのは火災が起こらんな」と、それが起こつとんねやと。そうしたら、ちようどそのときにその大垣さんは火災保険に入つとった。

—— ああ、怪しい話ですね(笑)。

藤本 それでね、その大垣さんもう経営せずね、甥に当たる、脇町の裏手の通りにある何とかいう洋服の裁断をしよつた人が来てしよつた。汽車に乗つて来てしよつた。その人のときに火災が起こつてな、この人は夜逃げした。ドロンした。それでおしまい。というのはな、映画というのは儲かると思てね、してみたら儲からんけ、皆、お手上げになる。

脇町にでも、脇町会館とか、江原会館とか、それから岩倉劇

場とか、はいから穴吹の相生座とか、こういう劇場は皆、四〇年までには参ってしもた。それで、その年齢層の人はね、皆、私のお父さんぐらいの年齢層だった。私が三〇で、みんな六〇ぐらいだった。そうしたら、皆さん方組合員が集まったらな、「藤本さんと勝負しても駄目じゃ。あの人は若い」と、皆やめてしもた。六〇の人はな、若い者は無鉄砲に儲からんで一生懸命に行くで、私や家内や一生懸命に行くで、ほんなら、皆は二本立て、うちは三本立てで行くねん。それでみんなやめてしもた。藤本さんと勝負してはいかん。

■貞光劇場と配給システム

—— その三本立てというのは、夜の上映も入れてということですか？

藤本 ああ、ナイトショー。ナイトショーは題名変えるんですよ。晩のやつはな、映画会社に頼んでな、私は東映を買いよったんよ。東映に言うてな、これ一本、普通の正式は一万円とするでしよう。ナイトショー用再映みたいなのをもろて、これを三千円にせえとか五千円にせえと。それに東映さんが協力してくれた。東映さんばかり、他は使わなんだ。他はナイトショーだけするフィルムがない。東映さんの場合は、第一東映と第二東映というのがあったんですよ。それで本数もあそこは

二本立てでいきよった。東宝は一本立て、松竹も一本、それから、日活は二本もしよったんが、東映だけオール二本、だから第一と第二で四本あったわけや。本数がいっぱいある。だからうちが買えた。それで救われた。

—— そのとき貞光劇場は、東映とか、東宝とか、松竹、日活と、それぞれ契約があったのですか？

藤本 そうそうそう、しよったんや。

—— それはどのように計算して。歩合制ではなくて。

藤本 歩合と違う。最初はね、徳島県に権利を持った人がおるんですよ。今はもう東映や東宝系といつても、会社が全部直営ですよ。昭和二〇年、三〇年代というのはね、映画会社が直接それを見つけても、相手が信用でけへんけん、劇場が信用でけへんけん、誰か徳島県下でそれを任そうと。その人が貸していく。徳島の鴨島には何とかいう貸す人がおったんですよ。それから、徳島の小松島に、そういう人がおった。それで、そういう人が県下の封切館以外のところへね、会社から買って貸していくよった。

—— ではフィルムごとにそういう契約をしたのですか？

藤本 それは昭和の三〇年代のいつからぐらいからね、もう映画会社から直接になった。セールスさんが回ってくるようになった。

—— ちなみに、その中で日活は入っていたのですか？
五社協定で。

藤本 日活は直接会社としました。

—— 他はその徳島のところを通じて。

藤本 東映とかね。そういうところから借りていった。徳島とか、鴨島とかにおったんやね。それから、ブロック屋というてね、外国映画とかね。昭和の二〇年代後半にシネマスコープができたときは、普通の映画でシネマスコープ。あれは東映が一番に始めたわな。シネマスコープというのは、レンズがああ、当時に安いやつで十何万したけん、昭和二〇年代に。ほんじゃけん、あれができたときに映画館はよう買わなんだ。

高いけ。そうしたら、そのブロック屋がそれを買ってね、全部次々回していった。それで、ブロック屋からフィルムを買って、それでそのレンズを買って。そやけど、そんなもの一年もせんうちにみんな買ったですよ。というのは、ブロック屋に頭使われてな、これは一万円としたら、一万五千円にレンズが付いとるけん、一万五千円。こんなことしよつたらもうからんじゃないかと、もうみんなが買った。安いんで一万何ほで、高いのはね、わしのが高かった。

—— そのとき映画は一本で幾らという計算だったのですか？ あるいは興行収入の何割というのではなくて。

藤本 いや、歩合はない。それは封切館だけ。そこまで信用してくれなんだ。一般館は。そうでしょう。現金を握つとって、「くれ」なんて言わんでいい話や。ほんじゃけん、直営館だけ。その歩合は。

でも日活だけは直接。

藤本 いやいや、歩合じゃない。うちらは。

—— 日活は違うのですか？

藤本 うん。何ほと買うやつ。石原裕次郎のこのフィルムは何ほ、これは何ほと、直接買いよるわけ。それで、他の会社は最初のうちはブロック館があつてね、ブロック館から買いつた。それも一般の劇場とすればからしい。会社に直接の方が安いじゃないか。ブロック館になったら一万円で買うても一万二千円とか取られるでな。それでいじめられるでな。これ欲しいと言ったら、「余計くれ」と言われるじゃ(笑)。

—— それも最盛期だから、大手会社の競争もかなり激しい時期だったと思うのですが、セールスマンとかは、他会社ではなくてうちのものにしてくれ、その分安くしてやるとかという話はなかったのですか。

藤本 最初はセールスさんがずつと毎月毎月回つて来よつた。そうしたら、しまいはね、セールスさんがそう回つたんで、会社も悪くなつたんですよ。経費が損するじゃないかと。それでもう会社がね、電話で、セールスさんと電話で、これは何ほとなるほど。昭和三〇年ぐらいに活躍したセールスマンから、話を聞いたことがあつたのですが、映画館から賄賂がいっぱいあつたと。

藤本 それはあつたですよ。それはある。

—— 普通はセールスマンが売り込むのだと思つていたの

ですが、そうではなくて、映画館の方から「売ってくれ」「売ってくれ」とセールスマンに賄賂を渡していたと聞いたのです。

藤本 売ってくれてな、セールスが回って来るんですよ。そうしたら、セールスがな、「藤本さん、これ十万円じゃ、十万円じゃけ」、そうしたら、十万円、「一万円渡すけ、八万円せえ」とかな、こう言うたらいかんけどね、それが特に多かったのは、東映。映画会社で一番面倒かったのは東宝さん。今でも面倒ですよ。東宝は融通が利かんの。ほんで高い。東宝は涙もない。ほんま。「こっちは実はこれだけ上がらんのやけ。それだけ出したら損すんやけ」「ほんならやめとけや」って。それに対して一番良かったのは松竹さん。これはもう伝統が古いで。松竹さんはね、昭和三〇年代、つぶれそうなときがあった。そんなときの写真をさっと出せへんけどね、全国大会を松竹さんはしてね、京都の南座へ全国の松竹の封切館を皆集めた。そのときに何ほくれたと思います？ 昭和三〇年代で、私が昭和三〇何年に行ったのはね、二万円くれたんですよ。というのは、旅館代というので。私は泊まらんと二万円持って帰った（笑）。

——それは集まった人全員に配ったわけですか。

藤本 全部くれた。後から送ってきたと思う。何で全国大会を開いたかといったらね、徳島県に封切館がなくなっただんですよ。というのは、第二東映ができたでしょう。そうしたら、松竹は入らんけん。みんな他のやつが入らんで、東宝は入らんで、

普通の東映と第二東映と、みんな第二東映になったわけ。そうしたら、徳島県に封切館がなくなっただ。それで、第二東映の封切館ができた。徳島県で松竹しよったらね、私とね、それと脇町に脇町会館というのがあった。それから、徳島にごく最近まで生きたった、私がよく知っていた、それはそのときいた人三人。二流館ばかりや。封切館は皆やめた。ほな、会社が丁重にしてくれた。松竹というところはな、竹次郎、松次郎で、代々古くから歌舞伎やらしるところでしょう。そやけ人情が厚い。弱いところは助けてやれと。松竹がつぶれるって封切館はみんななくなっただよ。それでも私が頑張ってたで、松竹をやめて二カ月おった。それでも二万円くれて招待を受けたで。そのやつが四国大会と何とか大会というやつな、写真やって、私は写つとるんですよ。セールスやったで、女優さん、誰か忘れたけどな。それで、京都の南座では、めかちんの歌手がおったでしょう。田端義夫か。上手な人がおったでしょう。それから、男前の何とか言いつたね、松竹の高田浩吉。あの人が出てな、当時のナンバーワンだわな。歌を歌ったですよ。それももう私、感動したわ。そやけど松竹は弱った。あの南座といったら一流ですわ。京都にある。それが、冬やのに、暖房がかかってない。経費節約しとる。もう儲からんというわけ。「寒いな」と言ってもな、「辛抱してよ」って。そやけど、二万円くれたけん。映画会社のつらいときやな、悲しいときというのを皆知つてきとんだよ。うれしいときもな。

—— 新東宝はどうだったのですか。新東宝の映画も上映したのですか？

藤本 新東宝もしました。新東宝は、しまいの方は政治映画になったけど、最初は新東宝は割と変わった映画をしたから入ったんですよ。

—— 昔はフィルムを買ったとおっしゃったのですが、でも後で返しましたよね。

藤本 そうそう。一週間に二回に分けて、うちと、脇町は脇町で一週間、またうちと鴨島で一週間、それで、それを三日と四日に割って使う。それはもう、後先使うところでもめるで、わしが先使いたいか。それで会社もうちらも、もうこんなことやめと、一週間交代にしてと、それで一週間になった。一週間したら替わり、一週間したら替わり、それで一カ月では四本じゃわな。五週あるときは五本でな。

—— 順番でもめるのですよね。誰が先、どの映画館が先。
藤本 その先というのは、順番が決まっとんよ。徳島の封切館がするでしょう。そうしたら、徳島県で、二番館というたらな、小松島とか、阿南とか、鳴門が二番館、その次は鴨島とか池田、その間はうちらみたいところや^{!!}。封切館をのけて、そういうところが先に使おうとしたらな、そこが十万としたらな、十万円余計出さなんだから貸してくれん。

■洋画と邦画

—— 洋画も劇場で上映されていたのですか。邦画だけです。邦画、洋画という両方をやったのですか？

藤本 あったけど、洋画はね、『地上最大のショウ』(The Greatest Show on Earth) セシル・B・デミル監督、一九五二年)というのが戦後できたの知らんですか。サーカスの映画。これが一番問題の映画。よう入ったんですよ。これはね、会社が無茶振りしよる。銭出そうが貸さんというんで。『地上最大のショウ』というのはその当時、しとるのは徳島県でうちが一番か二番かというぐらい。というのはね、洋画の、あれはこの洋画だったかな、とにかく高いところへ売る。それで、それは徳島県ではうちは佐古^{さこ}あたりにブロックしよるところがあった。ブロックというのは配給をしよるところがあつて、それが洋画のフィルムを買いよったんですよ。それが無理して買って、それで売るやつをしよった。そうしたら、私らは洋画はもう高いと思とるでしょう。それで買わなんだ。そうしたら、ブローカーというのがあつて、昭和二〇年代ですよ、そのブローカーがうちに、二〇年代で五万円するけん、先に二万五千円くれと言つてね、二万五千円渡した。それは『地上最大のショウ』という話題の映画でね、もうようけ入った。あのポスターがあつたら値打ちあるけん。うちは二万五千円出して、それだけ

入った。そのときの二万五千円じゃけん、錢大きい。それで、そのブローカーというのは先々でそうやってた。それでどこへ行ったか分かれへんようになった。そうしたら、会社にすればだよ、ブローカーに逃げられて。それで損した。それで、あとで買うてしたけんどね。それはすごいいい映画ですよ。よう入ったですよ。洋画ではもうあれだけ。

—— そのころ、昭和二―三〇年代は、日本の映画の最盛期ですね。

藤本 日本映画の最盛期じゃけん、無理に洋画せんでもな、日本映画が勝つとったけん。

—— そうですよ。三〇年代に入ると劇場の数もどんどん増えていくのですが、あとはテレビが普及することによって、また一気に。

藤本 あれはね、増えるのは、二〇年代後半から増えていた。それは『君の名は』とか、『この世の花』（穂積利昌監督、一九五五年）とか、それから、『喜びも悲しみも幾年月』（木下恵介監督、一九五七年）という、松竹です。大体二〇年代は松竹が全盛。というのはな、戦争で皆男性とか何ももういらだつとったで。そこへ松竹さんだとおとなしい映画でしょう。受けたわけ。女性にも受けたわけ。それで、女性がぱつと行き、男性は少ないで八割は女性。

—— それは意外ですね。貞光に来る観客は女性が多かったんですか？

藤本 そういう松竹の全盛のときはやけど、それで松竹さんが一段落ついた。そうしたら東映の東映スコープが出て、第一、第二が出て、客がもう東映に移ってしもた。それで松竹は駄目になった。それで、テレビが出たでしょう。もう全然駄目になった。それで、オリンピックとか、それから万博ができたでしょう。これも映画駄目。これに取られるけ。

それでね、これは余談だけどね、万博ができたときには映画技師が足らんんだ。というのは、こういう免許証を持つとらな、でけんけ。そうしたら、万博のときに、三カ月は百万円で集まりやった。技師を雇って。大阪万博は外国の建物ばかりだった。日本の建物は全然駄目だった。もう来とったのは英国や米国やソ連や、そういう国の建物ばかりだった。それで、そういうところも、技師さんが欲しかったわけやな。免許がいるけん。

■映画館の売り上げ

—— 全体的に見ると、貞光劇場が一番儲かった時期はいつごろですか？

藤本 儲かった時期というのはそんなにないよな、二〇年代の後半から三〇年代の初めまでや。ほんま短かった。あとはな、私と家内との苦勞で儲けた。私が働いたことによって収入があ

ったというだけ。

—— 当時の資料を調査すると、最盛期と言われているころ、日本の観客動員のピークになっている昭和三年のデータで、八割の劇場が赤字を出したという、かなり驚いた数字がみられました。

藤本 そうです。徳島も一緒でした。徳島東映といって一番威張ったところがやめるとき、どう言うたと思うね。「八〇万赤字が出たけんな、もう映画がロマンだった」って、それで「もう私はやめます」と、そう言うたら、東映が。

—— そういう大体の映画館は売店をやったりとか、喫茶店の経営をしたり、ボーリング場をやったりして何とかお金をやったのですが、映画だけでは儲からないという。

藤本 そうです。みんな映画だけだったらどうしても駄目。どうしても駄目。ほなけんどな、徳島東宝つてところがスーパーと一緒にあった。スーパーがやめたらついでやめた。そこも儲かって、そこは一番ええ場所だった。徳島東宝を持つった人は、四国銀行の浜田さんという頭取しよった、その親戚ではな、浜田さんといったら徳島の一等地で土地を持ってた。それで貸しとった。それを徳島東宝というところの直営館にしとったのが、やめてな、自分で経営しだした¹²。そうしたら、儲かさんのにビルの改修をしてな、とうとう土地も皆取られた。建物はもう取り壊しや。それもいけよったのは、親戚が頭取だったけな、四国銀行の頭取になった浜田さん。徳島でも

歌舞伎座つてな、何とかという社長や。それが徳島でも三館持ち、それから、阿南でも一館持ち、小松島でも一館、ようけ持つてるでしよう¹³。しまいはな、ドロロン。どこへ行ったか分からへんようになった。借金しとつて。哀れなもんじや。私だけ残つてくる(笑)。皆、哀れなことばかり。この三好郡でもな、池田に春日座というのがあった¹⁴。それも製材しよった。製材を売つて映画館したつてビルが建つた。そのビルは自分の銭かと思つたら違う。借金でしとつた。そうしたら借金で取られた。そのビル取られた。それで、自分も映画館しよつても駄目じゃけん、逃げるように往た。土地もその人のかと、わしは思つた。土地が違う。騙されてしもた。もう映画館つて皆そんなんで、哀れななんばかり。ほんま。まあ私だけ、というのは、私はそんな無茶せんけん。家内と二人で、ただ努力しよるというんで、儲けてない。家内と二人が働くだけ。

—— 貞光劇場以外にも脇町劇場で。

藤本 脇町もしたですよ。三〇年した。それでも一つ脇町会館が二〇年ぐらいした。それで、わがの土地になつとったけんどな、私はこつちへ引き揚げさせて売つてきた。脇町劇場を私は買つとったけんな。ほんでもう売つてきた。売つてきた銭も今、持つとつたら大金だよ。それでも、皆、映画に入れてしもた。こんなこと言うたらいかんけんどな、映画に入れてしもた。

—— 脇町劇場は、現在、オデオン座になっていますね。

いつからオデオン座になったのですか？

藤本 あれは山田洋次さんが映画を作ってからだ。あれは平成十一年かしら、いや、違う。もっと遅い。

■山田洋次監督との出会い

藤本 山田洋次さん、うちで撮りたい言うんじゃないけど、町はノーだった。一銭も出さん。それではいかな。山田洋次さんの奥さんの里は鳥取ですよ。鳥取でロケしたときにな、新聞に何ぼやな、七百万とか、奥さんの里の方に出すと載っとったですよ。ここはゼロや。それではでけへん。山田洋次さんはうちにロケハンに来た。それで山田洋次さんが気に入った。それで貞光町の連中は、「脇町の映画館も藤本さんがしよってたけん、見にいこう」と言った。そうしたら、脇町の映画館は景色はええんよ。前に柳があつてきれいに、な。それを山田洋次さんは気に入った。脇町の映画館の中は気に入らん。

——『虹をつかむ男』（一九九六年）ですね。

藤本 ヒットせんでな、中身が大事、中身が。山田洋次さん、あれはつらかった。というのは、貞光町は銭出さんだろ。それで、山田洋次さんはふらりふらりしよってな、東京から「藤本さん、中身はおたくを使わしてくれ」と電話がかかったんですよ。映画館の外観は脇町でええって。ほんじゃけん、中身をこ

こでロケさせてくれと。私はそれに反対した。なあ、そうでしょう。

——そうですね。

藤本 外観を向こうで撮られて、中身だけ。私はばかみたいなんもんです。それで私に東京から課長何とかから電話かかってきてな、関西社長かどなたか、電話がかかってきて、「藤本さん頼むわ」と、「ああ、私はそんなの嫌いじゃけん。脇町でしてきてかまわんけん」って。そうしたらね、中身は東京かどっかの劇場を映してきた。ほんで脇町じゃあ人氣が悪かった。みんなあれは「トリックじゃ」「トリックじゃ」と、違う。私が見たら分かる。中身はどっかの映画館のな、ちよっと古手のやつを持ってきて使うとる。

映画はここで封切って、私が映したんですよ。だからよく知つとる。だけど、全然入らなんだ。脇町は脇町劇場で上映でけんで、ホテルでした、がらがら。それでうちでしたら、うちのうち貞光劇場が気に入ったお客さんが観にきたから、いっぱい。四五百ぐらいやった。ロケしたところで映せばいいのに、それがでけん。それでホテルでね。全然駄目。どこでも全然駄目、うちだけ入った。あれはうちで一週間しました。ほんな、あんなん観たつて駄目。一時間四十分のうち一時間二十分はまあまあで、後の二十分はね、寅さんのあちこちしたやつを引っ付けとんねん。映画が一時間撮れんの、内容は。もうあれはな、私も山田さんに気の毒したと思うたんだよ。それよう乗

らなんだけん。それと、町が銭を出すっていうんだつたら初めから乗ってくる、山田さんは。そのときの新聞ではな、脇町は一千万と言った。山田洋次さんは鳥取出身ではない。鳥取では撮影しましたね。そのとき七百万ぐらい出すと言ったって。それは新聞には出ないと知らないけどな、脇町は一千万だ、貞光はゼロや。それには、なあ。

—— ちよつと、それは。

藤本 それで、私はな、とにかくこの町でもな、私を除けようとする。というのは、山田洋次さんは私を好いて来とるけん、私が出たらな、それ、泣き言みたいになつて役場が弱るけんね、私を山田洋次さんと会うときに出さんの。山田洋次さんには直接言うんですよ。マネージャーの人がお金を二百万ほど出してくれ。何でもかといったら、前日にちよつと木を植えたりね、ちよつとして細工するけん、その費用が要るけん、二百万出してくれと。それは私は知らんですよ。私はそんな席へ呼んでくれんのやけん。それは私以外の、貞光にふるさと探偵団というのがあったんですよ。そういうような行政するの。そんな人は集めるんやな。私はそれに入れんの。そういう集まりの中には。それで、又聞き、「藤本さんな、山田洋次さんの何とかいうマネージャーがな、二百万ほど要ると、出してくれと言うけん」。二百万も出すんだつたらな、映画作つてもらわんと。なあ、ちよつとな。

—— 山田監督はその映画以前からお知り合いでしたか？

藤本 知らない。それはね、町の職員がね、私がこういうしよるといふのを写真で、あれはね、今から二十何年前、役場の職員が来て、「藤本さん、おまえとこの映画館写すぞ」というて来るけんね、あれは七月だった。そうしたら、その男も私は初めて知った。役場の職員を。それがね、カメラマンみたいにカメラを二つ持つてね、外へ回り回るような格好で来たんですよ。それも私、分からんで、その人は「藤本さんな、おまえのところの劇場を映して、何とかの展覧会に出す」とその人が言うてきた。「ほんなら撮らないだ」と、それは七月の月はな。それで出した。

そうしたら、九月にその人にばつたり会った。わざわざ来んのや、その人も妙なもんでな。「藤本さん、山田洋次さんがな、気に入った」って言うねん。「あんたの劇場が気に入った」って。ほなけん、山田洋次さんを「呼びなさい」と言うやん。ほんなら、十一月に呼ぼうと。そうしたら、「ただ呼んだだけではいかんでよ、貞光劇場で寅さんの映画を五本しなさい」と私は言った。「それええな」というて決めた。それでまた、「藤本さんな、十二月に山田洋次さんに交渉しとんじやけん」どな、十二月は駄目じやと言う「もつとええ月にしない」と私は言うた。そうしたら二月じやて。二月も駄目じや、三月も駄目じや、そうしたら、山田洋次さんも、話せんでも分かっている、ここですじよつたら、二月や三月や二月に入りますがな。四月にしよと、四月の二十何日からしよと。

——よく覚えていますね。

藤本 ちょうどそれを私が覚えてんのはな、うちの子供のちのちの結婚式の前だった。山田洋次さんを招待しとるときはな、四月の二十何日ってな。それで、山田洋次さんこまで来たんだよ。そのときの写真がそこちよっとあるけんどね。それで、山田洋次さんが来たら、ほんなら私も昭和六年生まれで山田洋次さんともぴったり合うねんや。その感じは。六年同士のやけんな笑)。それで、山田洋次さんの映画をしようということになった。それが受けたんですよ。ようけ来ました。

そうしたら、その次は山田洋次さんが気に入ったわね。全国封切の『息子』（一九九一年）を貞光劇場でしたいとなった。全国封切なんだよ。第一をうちでするって。日本全国あるのに、山田洋次さんは気に入った。五千人から集めた。そろもう、わんさわんさいうて。徳島の封切館が、貞光の婦人会が徳島の映画館、貞光劇場がようけ入っているんで見にいった。二五人が入った。貞光でしたら満員。それでな、電話が徳島からかってくるんですよ。「それ今、松竹でやってますよ」と言う。「いや、貞光劇場で観たいんです」「ああ、そうですか。ほんなら来て、うち」。五千人から動員した。そうしたら、私に表彰状は来んの。みんな役場とかな。それで、国からの方も文部大臣賞かしらん、役場はもらいました。そういう頑張って町興ししようというんでね。それで松竹の社長さんからも招待があつて、町長は喜んで行きました。そうしたら感謝状をもらた

けど、役場へとなるだけ。そうしたら、読売新聞の記者がな、「けしからん。藤本さんの名前が全然出んな」と。そういうおかしな何とか、ハシモトさんか何とか、その人がね、「藤本さんな、私がな、あなたの名前を挙げてな、私と映画祭やろうや」と、「いいな」と。それで往んだ。これも妙なもんでね、十日経ってその人頓死した。死んだ。読売から電話がかかってきた。「藤本さんな、おまえに力入れとったハシモト、あの子が死んだんやで」と言つて、つらいなあ。向こうの読売の新聞記者の人も泣き声、私も泣き声になった。「私がな、映画祭やる」と言つて、「おまえの名前が全然出なんだ」。出るのは貞光のふるさと団長、阿佐哲也、もうその人の名前ばかり、出るのは。私の名前は一つも出んの¹⁵⁾。

ほなけんな、NHKやそんな人がな、「藤本さんの名前出んといかんな」と言うてこいうのがあつた。そういう映画が止まったときがあつたんで、私の反対で止まったときがあつた。それはどうして止まったかなというんでな、藤本さんから聞こうというんでな、全国にNHKが流さないかんけんというんでな、私を劇場の席に一人座らせて、それでNHKの人が私に対して質問する。そうしたら、私はそれに対して答えていく。そうしたら、私は泣きよったんですよ。涙出して。そうしたら、皆が違うと、「藤本さんは感動しとつて、目がきらきら光とつたな。あれはきれいに観えたでよ」と。違うんで、私はつらくて、泣いて、泣いて涙が出てな、そやる。それをNHKが流し

た。藤本さんはこういう理由でその映画を断ったじゃと。何でもかといったらな、私はな、貞光を売るんだったら協力しなう。脇町を売るために私は出られませんと。私はな、脇町を売るのに私が出てしよったら貞光の者に嫌われるで。だから、貞光に嫌われるということは使わんけどな、貞光のためにな、私は世話になりよねんけん、生活はここで受けとねんけん。貞光に助けられよねんけん。だから脇町には協力できん。それがテレビになった。そうしたら、今度は脇町に嫌われた、脇町の町民に。

■脇町劇場（現・オデオン座）について

—— その山田洋次の『虹をつかむ男』の話は、昭和六二（三年だ）と思いますが、そのときは脇町劇場をされていたか？

藤本 いや、私はやめとった。

—— やめていたのですか。やっていたのは、大体いつくらいいつごろまでですか。

藤本 私がしたのは、昭和四〇年から、昭和でいったら七〇年って。ということは、平成にして何年？ とにかく私はね、昭和にして七〇年と、そう覚えとる。なので三〇年しとるけん、七〇と覚えとる。

—— 山田洋次がその映画を撮るちょっと前にやめたという感じですね。

藤本 そうだ。一年か二年だろう。

—— 以前は脇町劇場、貞光劇場以外にもう一つの劇場をやっていたのですか？

藤本 脇町会館。ほなけん、あれ合併した江原に江原会館と、穴吹のところに相生座というのがあった。

—— 一番多いときは四つの劇場をお持ちでしたか？

藤本 私がしよったん？ この向こうに、私しよった。郡里劇場って。昭和二五年からね、私は脇町に昭和三六年に行ったけんね。その間で辞めた、私。小さい町やけんね、入らんけんね、もう見限って、それで昭和三五年に脇町会館に行った。

—— 昭和三五年というと、日本で劇場の数が一番多かったといわれる年ですね？

藤本 まあまあ、ええときじゃわな。

■映画界の危機

—— テレビの普及によってどんどん斜陽時代に入るのでしようけれども。

藤本 大体なくなつたね。私が脇町会館に行ったときも、私の前の人三人倒れとるんじゃけん。ということは、映画は悪

いけん。

——昭和三〇年後半になると、どんどん観客動員が減っていきませんが、特に地方の劇場の助け舟といわれたのは、ピンク映画の登場ですよ。なぜなら、成人映画が普通の映画よりずっと安かったから。

藤本 安かったというのではなしにな、普通の映画ではな、お客さんが切れてしまう。山田洋次さんの『家族はつらいよ』（二〇一六年）という、今、封切つとるでしょう。それはですよ、あそこに友達と行ったのがな、ちょっと一時間ぐらい待ちよつて、出てきた人間は何ぼと思うね？ 三、四人が出てきただけや。

そやけんどね、私が北島のシネコンに観にいったら、あんな立派な劇場をしているでしょう。広い建物で、あそこは階段ないんや。普通はみんな階段あるでな、段々になつて。あそこは階段ないんですよ。坂はずつと滑らんようにしてね。階段を作つてない。滑るけん。これはこんな勾配になつとるで、四五度。階段なしや、滑らんように。お金を掛けとるでしよう。そんな北島でも、私が五時に行つてたつた六人。儲かれへんで。あそここの経営資本はね、佐々木興業つて東京にあるでしよう。佐々木興業というて、全国の興行の会長しよるところですよ。映画年鑑では載つとる、日本一の興行師ですわ。ああいうような六スクリーンあるような建物を全国で何十館持つとる。それがそんなようけしよるけん、田舎のあそこで入らんでも、東京や

どこやらでよう入るけ、行きよる。

それで、あそここのシネコン、シネマサンシャイン北島は六、七スクリーンあるんですよ。今はやりのやつにな。一、二、三、四、五、六館までか。そうしたら、一、二、三、四はお客さんが出てこんねん。五、六は「ドラえもん」か何かしよつたんや。そこは五、六人が出てきた。それで、六のところに入つたのは私二人と、他は四人じゃ。それも女の人ばかり。男一人も、それじゃ駄目じゃ。やつぱり男も入らんで、女だけ。その女の人も見たらな、もう六〇以上の人がばかり。若い人一人もおらん。

それで、私と友達が入つたとき二人じゃ。わー、私らのため、「おい、藤本君、どこにでも座つてといつても、番号が付いてる。席が決まつとる」「誰ちゃおらんのにどこへでもええわ」というて座つとつたらな、その席はやつぱりよかつたけん、その四人来た人がそばへ来たで。番号の人が、「あら、すんまへんな」と、退いた。それで見たら、私入れて六人。それではあの映画は入つてない。普通の日、土曜や日曜だつたらな、大体朝から夕方まで入るわな。普通の日だつたら朝や昼は来ません。皆職を持つとるけん。五時か六時ぐらいになつたら職が済んだ人が来るようになる。ほんじゃけん、五、六時ごろが一番ようけ入らないかんねん。それが私を入れて六人。

—— ちよつと寂しい状況ですね。貞光劇場では、興行というのは、多分平日はみんな働いていたと思いますけれども、

大体最初の興行は昼の十二時ですか。

藤本 最初のときはね、こんなのがあつたんですよ。戦後はね、労働者が職がなかったでしょう。ほんじゃけん、とにかく職のない者は助けられないかんというんでね、役場に雇っていたんがあるんですよ。無理に雇ってやると。それが映画に来てくれたんですよ。それが朝の八、五時と働くんでなしに、役場はみんな仕事ないでしょう。そういう者を気の毒なというんで、六時間とか、五時間、三時間で雇ってくれた。日給取りみたいな、そういう人が来てくれたんですよ。戦後とな、三〇年代の初めぐらいまで。そんなが来るけん。そういう人がなくなつたらな、正式雇用になつたらな、もう朝の八時から五時までやつぱり映画に来れんで。

——— そうですよ。

藤本 そうでしょう。それで戦後、三〇年代の初めというのは、ご婦人方はな、昔は就職しとる。私も家内も一緒だけどな私が家内をもろたときはな、勤め人間は嫁さんにもらわな。少なかつたんですよ。

——— どうしてですか？

藤本 就職してはもらわん。というのな、就職しとる女性嫁さんとして似合わん。就職しとる者は駄目。うちの家内もな、学校上がつて、主に県職みたいなところに入つとつた。それで、嫁さんに行けんぞというんで、それで徳島のドレメつて洋裁学校に行った。それで、それを上がつてな、今度は和裁、

嫁入り道具や。そんな人しか売れなんだ。戦後ずつと。今は反対。今は就職しとらん子は嫁にもらわん。反対になつた。

——— そうですね。

藤本 ほなけん、映画はな、みんなの働きによつてな、駄目になつてきた。

——— ちなみにそういう時代で昼間に映画を観に来る人はどういう人ですか？

藤本 それはね、成人映画はね、まあ言うたらね、そういう職にも就けん、そういうような人が来てくれた。

——— なるほど。

藤本 そうしたらね、一般映画だつたら切れるんですよ。うちは大体子供映画は朝の十時から晩の五時まで連続で行く。一般映画は一時に決めとる。一時に行つたら普通の映画だつたらな一人も来るときある。

藤本 成人映画は大入りというのがないよ。大入りはないけど、成人映画の場合だつたらな、必ず一人か二人来る。それはどういう人が、こんなことは言うたらいかんけどな、体の不自由な人とか、どつちかというと、今言うたら認知症、そういうような者がな、親からちよつと錢をもろてな、「映画館でも行つとけ」と、そういう人が来てくれた。一般の映画の場合だつたらな、それはないんよ。成人映画の場合だつたらな、嫁さんのもらえん人がようけおつたでしょう。男性でも。今は男性でちゃんとした体の人でも嫁さんもらわん人はようけおるです

よ、今は。ここの役場でも副町長も嫁さんない。

■試写会と映画会社の支援

藤本 それで、『息子』という映画が封切したときに、先行封切があつたんです。先行封切につけたあれ、また私もすぐ出んけど、一般の人に無料で観せるやつがあるね。何ということかな。

—— 試写会ですか？

藤本 試写会か。試写会するでしょう。それを徳島で試写会したんですよ。それで、その試写会のときに、ある人から言われたんやけどな。「山田洋次さんの『息子』という映画な、先行封切を頼まれたんじゃないけど、おまえどうするね」。その先行封切のときに山田さんも来て挨拶して、それで、私に山田洋次さんから「藤本さんな、成功させてください」という葉書が私に來とるんですよ。これは木工会館¹⁶でしたときもな、いや、生きとる人のもんを展示するわけにいかんから展示せなんだけどな、山田洋次さんから直筆のペンで書いたやつがな、「藤本さん、この先行封切を成功させてください」と私に出した葉書がある。

山田洋次さんは、その試写会的时候会うたんじゃ。それに對して、新聞記者がな、私を当てた。私がどう言うかと思つて。

私も座席から壇上に出た。私が当たると思わなんだじゃろ。そうしたら、新聞記者がな、「藤本さんな、山田洋次さんや皆來とるんじゃ。おまえ何て言うじゃ」と。じゃけんな、私は立つて、『息子』ちゅう映画を觀ました」と、それと『青い山脈』も觀ました。『青い山脈』も田舎の映画で私は感動した。この『息子』も、ちょうど私の子供は東京におつて、おらなんだんや。こころな。私と家内だけみたいな感じで。私の境遇とよく似とるし、『青い山脈』は感動したけん、「この映画にも私は感動しました。ぜひこれを成功させないけません」。それで、私が立つて、皆もここの町長も、「ぜひ町長さん、成功させてください」と私は泣いてな、今も涙が出とるけど、そうやって私はお辞儀した、皆の前で。町長さんな、そのときどう言うたか知らん。そうしたら、皆がな、成功ささないかんちゅうで、わいわいわいわい言うて。助役さんや皆がな、学校周りからな、昔ここに貞光食糧という県下で何番という食糧の会社があるんだよ。そこは従業員が三百人おる。それに行つて、入場券千円で売つたやろ。三〇万だろ。「三〇万寄付して」と言つたら寄付してくれた。それで後から券を渡す。美馬商業は六百何ぼや、來いと、それも來ました。もうそんな団体にな、そういう人がな、半強制というか、それは皆もあんな信じて。貞光食糧だつて、「三〇万寄付して」と言つたら「はい」と。三百人の従業員に、それで後から前売り券三〇枚。美馬商業が來てくれた。六百人で。入場料何ぼじゃ。でも、そんなは私に報告がない

んや。入場料の話。それはそういうグループが計算してな。それで、あるとき全部松竹が取った。先行封切じゃけん。松竹が全部取る。それで、手数料を何ぼか渡す。これは松竹が全部取ったわけじゃ。

私はあるとき、私のその涙を皆が受けた。そうしたら、社会福祉協議大会というのがあるんじゃないな、年に一遍。それには数百人の町民が集まるんで。町長は全部それに招待券を渡して、招待券というのは無料の招待券だよ。それはお金が要るんだよ。招待券を全部こやって。それでもお金が集まるでしょう。何百人に全部やるんで。そうしたら町会議員もまた感動して、町会議員が受け持って、二〇人か三〇人の町会議員皆が百枚とか何十枚受け持って、私が全部銭出して、どこその部落、部落に全部配り、同窓に全部配り、ほんじゃけん、五千人から。ほんじゃけん、私の涙が効いたで、大勢の者が、何百人が県下の者が集まるところで私が泣いてやるもんじゃけん。町長にこやってお辞儀したら、ええ格好になつとるわな、皆から見たら(笑)。

—— 教育機関、例えば学校は、昔よく劇場と提携して教育映画を上映することが、都会にはあったのですが、ここではあまりなかったのですか？

藤本 それはなかったね。ただ、許可映画といってね、私らがその許可映画願ったらね、当時は五〇円ぐらいになった。入場料がな。「許可映画でしますからお願いします」と言ったら、

ほんなら、「許可、はい、渡しませう」と言ったら、割引券で来て、七〇円のやつを五〇円ぐらいで入ったわけ。それは安定していませんよ。許可でいってもよいというだけのことであって、何人来るやら分からん。これはな。前売りでないけんね。じゃけんね、映画というのはね、苦勞しました。苦勞だけ。

■映画館の日常風景

—— 昔は何の映画を上映するか、どこで宣伝したのですか？ 新聞に広告を出しましたか？

藤本 うち新聞に載せません。一遍も載せん。それは新聞社が皆面倒くさい。新聞社からやな、誘いがあつたけど載せなんだ。うちだけじゃ、載せてなかったのは。

—— それには理由があるのですか？

藤本 それじゃってな、考えてみなさいよ。あれは一カ月に五万円も要るんですよ。今は何ぼ要るか知らんですよ。前、確認してな、誰それ劇場何と、月五万や。うちの劇場でな、五万も払いよつたら、すぐに参つてしまふ。ほんじゃけん、しまいがたになつたら、徳島でも封切館がみんな載せんようになって。前はちゃんと絵入りでな、日付もちゃんと入って、どこその劇場というのがはつきり分かつた。今、新聞の記事にちよつと書いてあるようなんで分からんで、広告は全然。

もう経費が皆余計に。うちは新聞には全然載せんんだ。

——では自分で何か週報などを出したのですか？

藤本 うん、チラシもな、もう最初だけだった。今、新聞の折り込みといったら、新聞社は新聞でなしにチラシでもうかりよる。ほなけん、新聞は全然販売店は利益ないんだよ。新聞社に握られとる。それでチラシで儲かる。その代わりチラシは毎日十万ぐらいもうかる。毎日ですよ。あれ一点入る。私はな、昭和三〇年代というたら、チラシは映画館がなかったんや。一般の商店やそんなん入れん。

——ではどのように宣伝したのですか。

藤本 宣伝は私はね、一般の映画はポスターだけでいきよつた。ポスターはようけ貼る。子供映画はね、これは「藤本さん、あんたがモデルでやって」、そういう何の映画、最後作つたでしょう。山田洋次さんが作つた、脇町で。そう、「虹をつかむ男」かな。あれ私がモデル。みんながそう言う。というのは、山田洋次さんがな、あの何とかいうの、ポスター貼りよんねん。それで、宣伝はマイクでしよる。それを皆が「藤本さんと一緒に」と言うんじや。私は子供映画、大体こう美馬郡、私がポスターを貼るのは広いのですよ。この美馬郡全体に貼るんだよ。私がポスターを。それで、チラシを二千枚、それは放るんじやないんですよ。配っていく。生徒が土曜日は早じまいするでしょう。それから、昼からだつたら三時、四時に終わるでしょう。それを家内と私が配るんや。

——子供相手に配るのですか？

藤本 子供映画。一般の大人はしない。一般の大人にそんなことをしたつて来んの。それは駄目。一般の大人はな、どこそこポスターがあるというのが分かつたらな、それを見てくる。もう子供だけ。チラシというのは子供だけ。私はそれをしよつたわけよ。しまいはね、私は宣伝してチラシを配る。片一方はマイクで宣伝。車でして。朝の八時からね。

——今晚、こういう映画をやりますと。

藤本 「映画を何時から何時までしますから来てください」と言つて、それをずっと回る。それがね、「藤本さんな、あんたの声はきれいわ。よう分かるわ」と言うて（笑）。そうしたら、山田さんが『虹をつかむ男』でそれを実施したんで、マイクで宣伝する。それでポスター貼りしよる。「それは藤本さんの仕方と一緒に」と言うねん。

——確かに声はすぐ通りますよ。電話でお話したときもつと若いと思つていました。

藤本 私ね、女性の声に聞こえませんか。

——最初出たときは女性の方だと思つて。「藤本さんに取り次いでください」と。

藤本 それで、私ね、今、老人になつてきたらね、売り込み、いろいろな電話がかかってくるんですよ。よく効く薬とか、栄養剤とかいろいろなもの。そんなんね、電話やチラシみたいな無料で一カ月あげますよいうて、かかってくるの。それで、私

が出るでしょう。「奥さんですか」とこう言うの。「いや、違いますよ」と、「ご主人さんですか」と。ほんじゃけん、私は女性に聞こえるのかなと思て。

私はな、宣伝に出かけて、一時までに宣伝して、上映のために戻って来ないかん。十時からだったたら十時までに戻ってこないかんでしょう。ほんじゃけん、朝早うに起きてね、八時に起きて、それで十時まで二時間内で、この辺からばーっと回る。運転で、こっちがマイク。普通だったたら怒られるで、警察に。警察が来よったら止まっつてな、走りもっつて宣伝いかんで、止まっつて、警察が来よっつとる。

———　そして、その後は映画館に。

藤本　そう、映画館で技師するんじや。脇町に行くまではな、うちに技師もそういう従業員もおったけん、何人かおったけん、大体多いときは八人ぐらいおった。技師さんでも常時三人ぐらいおったけん。大体私が脇町に行くようになってぐらゐから技師さんがもうおらんようになった。脇町に行くようになったのは、経営も悪くなっつとるけん、技師さんは減らさなけん、でな、技師さんが大勢おったさかい。多いときは四人ぐらい。その技師さんの写つとる写真もあるけん、私入れて四人ぐらい写つとる。三人か四人常時おったけん。従業員の人も。三〇年代というのは車の時代でなかった。自転車時代。自転車ばっかりいっばい来よった。自転車預かりというのがあった。自転車預かりというのがいつも。それは預かつて、荷札

を付けてね、それで自転車の番するん。それから、下足預かり。うちに皆、土足で上げなんだ、二〇年代は。下足を預かつて、下駄を預かる。そんなんがあつた。昔はね。ほんじゃけん、金比羅さんいまだにしようで。金丸座はいまだに下足預かりで。うちもあれだった。

———　では下は升席だったのですか？

藤本　うちは畳でね、縦横に板間だったんですよ。それで畳だった。

———　椅子を置いたのはいつからですか？

藤本　あれはね、『君の名は』が出たぐらいだから、昭和二五〇六年になったかならんぐらいじやね。七〇八年ぐらいじやね。

———　映画館になってから少し経っている。

藤本　映画は、そうせなんだね、下足預かりでは皆が嫌いだしたんや。ほなけん、よう考えたらね、畳の方が得ですよ。椅子だったらもう定員も決まるしな。畳だったらな、入れ、入れ。一遍ね、貞光商工会がしたとき、椅子では入りきれんけんといつて、椅子を全部出したんだよ、外へ。それで、下へむしろを敷いてした。七〇八百から千近く入れたな(笑)。

■戦後の入場税

—— 昭和二〇年代、戦後の映画館主にとって、入場税が非常に高かったことは、かなり大きな悩みだったようです。

藤本 その入場税というのはね、戦後からの昭和二〇年、オリンピックというのはいつありましたか。オリンピックは昭和三八年かね。

—— 三九年ですね。一九六四年。

藤本 あのときまでね、入場税が要ったんですよ。それで、田舎の場合は入場料金五五円。五円が要るな。封切館は七五円、そのように決められた。そやけど、東京オリンピックのときはね、うちらは映画会社に協力するといふんでね、入場の入っただけを税務署に申告したら入場税が無税になった。その特権があった。それは何でかといったらね、『東京オリンピック』（市川崑監督、一九六四年）という映画を作った。業者とオリンピックと文部省か、三会社がそういう入場料金ですか、それを分けるようになった。国にとつたらオリンピックが取るのにな、私らが映画して奉公するじやろ。それで税金を取られたらかなわんで。ほなけんな、何ぼ入りますといふのを申告したらな、税務署は「ああ、よろしい」と。

—— 具体的にはその入場税はどのように？ 税務局は劇場と、どのように計算なさったのですか？

藤本 それは入場料の切符というのはね、税務署で判子を押してきよった。税務署の許可が要ったんだ。

—— よくポスターにも印紙が貼ってあることがありますけれども。

藤本 ポスターに貼つとるのは、それは割引券でしょう。

—— いやいや、ポスターに印紙が貼ってあつて。あれは税金なのですか？

藤本 それはね、こんながあつたんですよ。それは町によつてな、ポスターを貼らさんという時があつたんですよ。町、町で、そういう広告税というものを取つたらええんやといふんで。ここはなかつたけどね、うちの隣の町でそんなことがちよつとあつたですよ。そうしたらな、私は異議を言つた。「田舎のものにな、そんな広告税を取るんやいうてな、無理じゃないか」つて、「そんなことは無茶言ふな」と言つてな、もう取らさんんだ。それは広告税といつてな、国がそんなポスターを貼りますのな、取つたらええじゃないかといふんでな、それで、それは判子を押したら広告税を納めた印やて（笑）。

—— では入場税の場合は、チケットに判子が押してあるものでないや違法になるわけですね。

藤本 そう。違法といつたつて、それは税務署で押してくれる。入場券はこんなんですね。

—— 昭和二六年ごろ、入場税は一五〇%でしたよね。

藤本 これは半券ですよ。私は税務署の何が要らんとときの判

子じゃから、こういう入場券があったわけですよ。そうしたらここにね、これは私が千円とか二千円とか書いとるけんな、ここに税務署が税務署と入れてある判子を押しよった。そうしたら、使ったら分かるでな、何枚というのがな。これ一冊が五百と三百と二百というのがあるのだよな。

——それは毎月計算して。

藤本 そうそうそう。税務署に行つてな、この券を、大体ばつと入場者が分かるんで、ずつとしていきよつたらな。そうしたら税務署へ行つて、入場券をくださいと。私が持つていったと思う。それで、ここに税務署の判子を押してる。

——買うのですか？

藤本 いや、私が買うたんを持つていつて押ししてもらいよつたんや。税務署では買えません。

——昭和二〇年代は入場税というのがあつたんですけど、その後は名前は確かに変わったと思います。

藤本 今の取り方とは、どんななつて。

——今は多分普通の消費税のみになつてゐるのではないでしょうが。

藤本 私らのときは、ただ入場税というて、必ずこの一枚に何ぼ要るというのが、使つたら要るんだよ。五五円にしよつたというのは、五円が入場税でというんでな、これに五五円の判子を押してな、それで税務署の判子をもらいよつたで。そうしたら、これは自分の切符みたいになつて、入場税は要らんけん

な、こういうような式のもんを税務署へ二百綴つとるか、五百のやつを持つていつてな、「今月はこんだけあつたらいますけん」と言つたら、そうしたら、税務署がばんばんと税務署の判子を押す。大体分かるで、毎月要るのは。それで、五百枚は五百枚な。そうしたら、それだけの申告をするわね。毎月毎月な。月回つてから申告、何ぼ入りましたけん。そうしたら、税務署はこの券で分かるけんな。券を持つていつて見せよつたで。

——ああ、それで向こうでチェックしたのですね。

藤本 うん、券を持つていくねん。「これだけ売れてますけん」と。

■組合について

——映画館側は入場税にかなり抗議したそうで、それは個人の館主などで抗議しても何もならないので、大体は組合が中心になつてゐたのですが、徳島県の興行組合はどうでしたか。

藤本 あれは私だけ入つてなかつた。

——入らなかつたのですか？

藤本 うん。どうしてかといつたらな、組合は徳島市内でよ、地方におつたのは私一人や。入場券も差が付いて、向こうは千円も取りよつたんじゃな。そういうときに。私は二百円、百五十円や、取りよんがな。そんなところは売上げが違ふ。

売り上げに対して組合費を納めないかん。そうしたら、うちは売り上げも少ない。それを少ないことを言うて払うのも少ないでは、恥ずかしい。分かるでしょう。傲慢にはならんの。今、たばこは売り上げによって組合費を取られよる。もうこれはしやあない。

—— 大手会社の映画を上映したときは問題にならなかったのですか？

藤本 ならなんだ。

—— 普通は映倫というか。

藤本 映倫があつたつて、組合員と関係ない。

—— 組合員でないと上映できないという規則になつてゐるんですけど。

藤本 それはない。

—— それはなかつたのですか？

藤本 うん。それはね、私は一遍もな、「組合員に藤本さん入つたらんな、入れ」と言う人は一人もなかつた。その映画界だよ。映画界というのはだよ、それは東宝や松竹や何かのな、「藤本さん、組合に入つてないな」と言う。「うん、私な、あそここの組合費を払いよつたらな、私、一カ月の宣材ができるわ」と言うねん。組合に何万円を払わないかんで。そうしたら、それでな、私の一カ月のポスターや買ううちはみんな出るというねん。そうしたら、もう映画会社は何も言わんねん。田舎の収入は少ないけん、組合に組合費を納めよつたらだよ、その納

めるだけで宣材が買えるというねん。それと、新聞社に広告を載せるでしよう。それに何万も払いよつたらな、一人でも人が雇えるねんと。そう言うたら言いようがない、向こうは。そうでしよう。それだけ小さい、うちの方は下番線というねんな。下番線の映画館は儲からん。儲からんけん、無理は言えんつて。

—— それでは映写技師の免許さえあれば誰でも三五ミリの上映ができたのですか？

藤本 そうですよ。この時代はな。映写機を映せんというのにはね、労働基準局が言いよつた。私も一級技師を後から取つとるけんね。一級技師がおらんんだらでけなんだ。一級技師がおつて、映写技師、一般の。ほんじゃけん、私は一級技師の免許、早い番号、みんなびつくりしとる。「藤本さん、七一番つて早いな、あんた」つて。

■貞光劇場の休館

—— 貞光劇場が二〇〇六年に休館になつたのは、藤本さんの体調に理由があつたのですか？

藤本 私は体が悪くなつた。

—— 悪くなつて、一時期には休館という。

藤本 うん。私ね、逆流性食道炎という、胃が逆流するんね。

そうしたら酸っぱいのが口に出てくるんですよ。その薬をね、私、今ちょっとそれをやめて違う薬に変えとるんやけどね、もう七、八年飲むんです。そうしたらね、薬はね、副作用というのがある。副作用というのは誰にでも出るもんじゃない。人によって出るぐらいに思いつた。そうしたら、このごろ薬をもろたら必ず副作用、目のちらつき、ふらつき、目に異常、出血、胸が苦しいといういろいろあるんですよ。一番いけないのはな、目に異常というのがあったんですよ。私は気にしてなかった。妙に運転がおかしくなる。それで辛抱してしよつたら、今度、映写機は二台あるでしょう。そうしたらね、二台あって、妙なもんですよ。右側はコンクリがあるけんね、倒れてもコンクリで助かると思うんですよ。壁に行つて。そうしたら、左側は真ん中を通るけん、倒れたらこっちの機械に噛まれるでしょう。それで、こう持ち上げるのがね、今までこれぐらいのフィルムで七、八分というフィルムだった。最近は何、フィルムの周りはかなり大きいわね。もう今それもなくなくなったけど、それを持ち上げるのを私一人で上がらんようになった。ふらつくけん。そのかけるときだけは家内と私は二人でかけよつた。そうしたら、やっぱり家内がおらんんだらでけんのかな。もうこれではな。

—— 仕事きたいへんですね。

藤本 これはやめた方がましやて。それと、映写機は一カ月前にそれをしよつたのがね、一台が調子悪くなつて、それで大阪のタケナカ¹⁷に電話かけても、一カ月もかかつて、「いや、

今日は九州じゃ」「今日は沖縄じゃ」言うてな、来なんだ。それで一カ月後に来てな、直してくれた。もう遅い。そのときはもう私もくたびれてしよとる。それで、直して一〇万円取られた(笑)。それで家内と言うて、もつと早よ、やめとつたらよかつたのに。直してそのままじゃ。

—— もつたいない。

■映画館の外見

—— 今、青色に塗ってありますけれども、あれは昔からあの色。

藤本 いや、ああいう色にした。あれね、木造建築にはな、塗装せなんだらもたんですよ。あれはうちのおやじのときでね、昭和三〇年代に一遍替えただけ。私が替えたのはね、私で三遍ぐらい替えとる。今これは三回目ですよ。山田洋次さんが来たときは一番悪いときよ。一番悪いときの塗装。建物の写真あるけん、見たら分かる。それは一番悪いとき。それから後、二回替えとるんですよ。色もあれに近いような色だったけども、どうしても濃い色でなかったらね、すぐはげちよろになるんですよ。黄色じみたとか、白地じみたらもう、もう銭放ると一緒。ほんじゃけん、ちよつと濃く青い色にしろた。あれははなけん最終。それでももう一〇年経つとるわね。

——では一番最初はどういう色だったのですか？

藤本 どういう色ってね。一番最初のやつは写真はないけど、山田洋次さんの写しとるときは二番目ぐらいじゃけん分かるわ。あれに近い色じゃけん。一番最初のやつはね、とにかく白に近い黄色じみた色じゃ。そんな色はすぐにはげる。

——ああ、なるほど。

藤本 こういう青いのは強いね。ほんじゃけん、今のこれ見て、一〇年経ってもこれ。

——きれいですね。

藤本 そうでしょう。一〇年たつてあれじゃけん。みんなが「まだきれい」と言うてくれる。

——きれいです。目立ちますし。

藤本 うん。誰が来ても「きれいな」と言うねん。私の友達がね、脇町中学を卒業して六〇年も五〇年もなるんだよ。それが初めて見て、「藤本さん、きれい」とこう言うんだよな。その同級生が。誰が見てもきれいと言うてくれる。私がね、「色を濃い目にしてください」と言った。塗り替えするといつても、すぐもう百万円ではならない。塗り替えは足場して高いけんな。それで、あれの前にやぐらがあつただけどね、もうそのやぐらもな、この前するときのけた。

——ではやぐらはいつ最近まであつたのですか？

藤本 最近といったって、これを塗り替えて、もう一つ塗り替えやからもう二〇年。

——戦後に大きく変わったことは。スクリーンとか、劇場の中がいろいろと変化しましたか？

藤本 ないね。

——スクリーンぐらいは？

藤本 変化はね、前にこう板であるでしょう。あれだけ塗つた。黄色かしら塗つとる。それと板がちよつと青に塗れとるわね。それだけ。他は全然いってない。

——あとはそのままになっている。

藤本 そのまま。

——先ほど新聞の広告はあまり出さなかったとおっしゃっていたのですが。

藤本 新聞の広告はしない。絶対一遍も。

——プログラムとか、そういう記録などは残っているのですか？ どういった映画が上映されたか。大体昔の新聞の映画欄を見ると調べることができるのですが、そういうものを出さなかった場合は。

藤本 映画はようけした。どんなことを言われたつて映画はようけしとるけんな。大体東映映画は大方したわな。

——藤本さんはそういう記録を残しているのですか？

藤本 残してない。必要に感じなんだ。大体したようなのは、ポスターはみんな私持つとるけん。木工会館¹⁸でしたときのな、展示したポスターでも私、見せてあげてもええけんど。

——藤本さんの記憶では、一番客が入ったとか、一番当

たった作品というのはあるのですか？

藤本 それはね、私が一番ようけしたのは『君の名は』、これは最高じゃ。それから、『君の名は』と、日本映画では吉永と何が出た『愛と死をみつめて』ね。ちょっと古いやつばかり。新しいのではね、山田洋次さんの寅さんでは絶対入らなんだ。田舎に向いてなかった。それで、寅さんの映画というけどね、私は正月にかけたんですよ。

—— それは大体正月封切でしたね。

藤本 駄目。入らなんだ。それはね、山田洋次さんは、皆は一般的に見て、山田洋次さんの寅さんはね、田舎向きでないんですよ。というのは、寅さんの下町の田舎のことばかりでしょう。

—— 都会住まいの何か古き良き時代の。

藤本 そうでしょう。格好にしたって、ズボンでもステテコみたいなのはいてね、田舎の人はあれだったんで。私のおやじはね、徳島に行くのに着物で行った。私のおやじは着物ばかりの人だったんですよ。服はあまり着なんだ。着物はあった。賞状をもらいに行くの、賞状、写真もあるけど、当時は着物でもらいよる。

■ 貞光劇場の将来

—— 将来的には貞光劇場はどうなるのでしょうか？

藤本 これね、私も、このごろどうかせなんだら死にきれんで、それは私も思つとる。私の一番難題はね、この劇場をどうして残すかということで、それが今、一番私の頭に來とんねん。

—— 重要文化財に指定されるべきだと思います。

藤本 それはみんなが思とるんですよ。藤本さんどうするかって。内々ではみんなそう思とる。

—— 今、つるぎ町では、そういう保存する動きがあるのですか？

藤本 これは無いんですよ。だけれども、私は無理にせんの。無理にせんでええと言うの。登録文化財になった場合はな、自由に自分の権利がなくなるの。これを売ろうたって、すぐ。

—— 行政による保存の必要がありますね。我々がこのインタビューを残すように、劇場そのものを残すことが課題ですね。本日は長時間にわたって、ありがとうございます。

(日時 二〇一六年四月七日(木) 徳島県美馬郡つるぎ町の藤本宅にて)

註

1 『貞光町史』（徳島県美馬郡貞光町役場、一九六五年）に、以下の記述がある。

映画館は駅東松尾神社より西一五〇米の所に在り、貞光劇場と称す。本映画館はもと町収入役津司豊の経営であつたが、後現在の藤本伝助がこれを買ひとり、古くから貞光町唯一の娯楽場として繁栄し今日に至つたものである。後年松尾神社東隣りに村雲松見、大垣保夫、大島瑛などの共同によりて貞光会館が生まれたのである。久しく貞光にはただ一つの劇場だけであつたが、新しく誕生したこの会館を併せて二つとなつたものである。（中略）貞光会館は遂に昭和三八年三月から閉館のやむなきに至つた。（一五二三頁）

- 2 浪曲師。初代春野百合子は一九〇〇年福岡県博多に生まれ、九歳で都花子の名で浪曲の道に入る。一五歳で大阪へ出て、春野百合子と改名し関西浪曲界の女流看板として活躍した。戦時中は四国に疎開、一九四六年に死去。
- 3 筒井製絲は一九一〇年に創業。戦後に吉野川市に移転した。
- 4 一九四八年、徳島市新町橋筋に開館した勤労クラブのこ（坂東惣夫）とくしま映画三代記』徳島県教育会出版部、一九六五年、一二四頁。
- 5 『君の名は』の公開は、映画館としての貞光劇場の開館後のため、これは藤本氏の思い違いと思われる。
- 6 一九五三年に貞光劇場が設置していた映写機はミクニ四号、発声機はBCRビクター（映画年鑑別冊 全国映画館総覧）

時事通信社、一九五三年、一三三頁。

7 大阪の映像音響会社。一九二六年に武仲清次郎が映写機の販売をはじめ、一九五八年に現在の社名、株式会社タケナカとなる（株式会社タケナカについて 沿革」http://www.takenaka-co.co.jp/07company/company_history.html 二〇一七年一月三十一日アクセス）。

8 『映画年鑑別冊 全国映画館総覧』（時事通信社、一九五三年、一三二頁）等に、支配人として藤本茂の名前がみられる。

9 徳島県美馬市脇町のこと。

10 後述するように、藤本氏は後年、脇町劇場の興行も手掛けていた。

11 『徳島県史』（徳島県、一九六七年）に以下のような記述がある。

昭和三十年（一九五五）徳島市内（旧市内人口約十二万）常設館は、第一・東宝・松映・名劇・シントミ・徳島会館の六封切館、式番館十一、新市内を入れると人口九千に一館の割合に乱立し、この趨勢は県下全町村におよび、いかなる僻村にも映画館が立ち、中にはせまい村に多くの映画館が生れたため、その宣伝のために昼ごろから放送するラウド・スピーカーの高音響のために小・中学校の授業が妨げられたところも数多く聞えた。（六九七一六九八頁）

12 徳島東宝が閉館した二〇〇六年の経営は徳島興行株式会社、代表は浜田豊（映画年鑑別冊 映画館名簿』時事映画通信社、二〇〇五年、一七三頁）。

13 徳島市内で徳島松竹（のちの歌舞伎座）、徳島松映、SY

松竹座、小松島市で港東映、港新劇を経営していた高瀬芳太郎のことと思われる（『映画年鑑別冊 映画便覧』時事通信社、一九六〇年、二四三―二四四頁）。

14 閉館は一九八八年、経営会社は池田劇場株式会社、代表は三舟登（『映画年鑑別冊 映画館名簿』時事映画通信社、一九八七年、一二三頁）。

15 『貞光町史 二十年のあゆみ・地域誌』（徳島県貞光町、二〇〇四年）に、以下の記述がある。

平成二年（一九九〇）に「自分たちのふるさとの歴史や文化をよく知り、誇りをもって暮らそう」と商工会青年部と役場職員で構成された「ふるさと研究会」が発展し、さらに多くの仲間を集めた「貞光ふるさと探偵団」が誕生した。

平成三年四月に開催された「山田洋次映画祭」の感動は今も町民の胸に刻み込まれている。当日は山田洋次監督

を迎え、昭和七年（一九三二）に建築された県下最古の

劇場である「貞光劇場」を舞台に、寅さんシリーズなど五本の同監督作品の上映、他会場では講演会、パネルトークも実施された。劇場の櫓からは寅さんの主題歌が流れ、映画「幸せの黄色いハンカチ」にならない町内各商店の軒先には黄色いハンカチがひるがえり、徳島駅と貞光駅の間では「寅さん列車」が運行された。この映画祭がきっかけとなり、同監督作品「息子」の全国に先駆けての先行ロードショーや、美馬郡がロケ地となった八年公開の「虹をつかむ男」の誕生へとつながった。（三〇五頁）

16 二〇一二年に徳島市の木工会館で、企画展「貞光劇場展」が開催され、約九〇点のポスターなどが展示された（『広報つるぎ』八七号、二〇二二年、一五頁）。

17 注7を参照のこと。

18 注15を参照のこと。

解説

藤本一二三氏が経営していた貞光劇場は、徳島県美馬郡つるぎ町に立地する映画館である。その館名は、二〇〇五年に、半田町、一字村と合併してつるぎ町が成立したことで消滅した、貞光町の地名に由来するものである。貞光を含むつるぎ町は、讃岐山脈と四国山地に囲まれて東西に延びた徳島平野の中西部にある。つるぎ町の北側は、徳島平野の中心を流れる、四国で二番目に長い吉野川があり、南側は、同じく四国で二番目に高い、標高約二千メートルの剣山があつて、豊かな自然に囲まれた地域である。貞光劇場は、徳島市から50キロ西方に位置し、近傍の公共交通機関としてJR徳島線の貞光駅が存在している。映画年鑑によると、美馬郡にもっとも多く映画館が存在したのは一九六〇年で、協町会館、岩倉劇場（ともに協町）、貞光会館、貞光劇場（ともに貞光町）、相生座（穴吹町）が開館していた。ただし、ここには開館してはたらずの協町劇場（現・オデオン座）が含まれておらず、映画年鑑がかならずしも正確とはいえない。一九五三年の映画年鑑は、美馬郡に協町劇場、協町会館、貞光劇場の三館が開館していたと記載されている。

都市の大規模な映画館はともかく、こうした地方の小規模な

映画館の興行については、これまで研究が進んでおらず、興行の詳細は明らかにされてこなかった。今回、藤本氏のオーラル・ヒストリーによって、新たに解明されたいくつかの事実があった。そのひとつが、宣伝に関することである。通常、都市の映画館においては、正面に絵看板を出すことはもとより、引札や週報、チラシを配布したり、辻ビラやポスターを貼付したり、新聞に広告記事を出したりという方法が知られていた。今回のインタビュでは、ポスターを除き、それらの方法は使われておらず、もっぱら宣伝車で周辺地域を回るという手段がとられていた。これは、『徳島県史』（徳島県、一九六七年）の「せまい村に多くの映画館が生まれたため、その宣伝のために小・中・高の授業が妨げられたところも数多く聞えた」（六九七―六九八頁）という記述とも合致する。また、無声映画時代に地方の映画興行で大きな役割を果たした巡回興行とも通じる手法である。たとえば、初期の興行師として知られる駒田好洋は、当時を回想して「十人のブラスバンド（中略）九時からこのバンドは徒歩、他に「いなり」と俗にいう旗を百本ばかり立てながら、馬鹿馬鹿しく大きな引札をくばりながら町回りした」（『都新聞』一九三〇年五月五日）と語っている。そのような興行形態の関連性は、研究テーマとして興味深いものだろう。

なお、一九三二年に竣工した貞光劇場の建築は、すでに築後八五年が経過している。戦後に映画館となったため、各所に改

修はされているものの、劇場として使われていた戦前の名残も数多くみられる。たとえば、回り舞台が、舞台下の装置も含めて現存しているほか、藤本氏の談によれば、天井に貼られた酒屋等の引札の類は、戦前のままの状態で残されているとのことである。また畳敷きの栈敷席も、劇場であつた時代の様子を、色濃く残している。たとえば近隣の美馬市にある、『虹をつかむ男』（山田洋次監督、一九九六年）のロケ地となつたオデオン座（旧・脇町劇場）が、回り舞台の廃止など、観光向けの改築によって、建築当時の面影がほとんど残されていないことに比べると、現存する映画館建築としての貞光劇場の重要性は際立っている。

二〇〇〇年代以降、シネマコンプレックスの普及、建築基準法の改正による耐震基準の変更、デジタル配信による映像コンテンツ受容の変化、高齢化にともなう地方の人口減少など、日

本の多くの地域において、映画館の経営はもとより、その建築自体の存続も、きわめて厳しい状況におかれている。映画館のアカデミックな研究を通じて、映画研究者も、その重要性を広く社会に示し、行政と協力しながら、存続の方策を模索していく必要があるだろう。映画研究者によって、映画の保存が叫ばれて久しい現在であるが、フィルムの伝承が重要なものと同じく、映画館も、失われた建築を取り戻すことは二度とできないのである。

今回のインタビューをおこなつたローランド・ドマーニグ、スザンネ・シエアマン、上田学は、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点公募研究「演劇博物館所蔵の映画館資料に関する複合的カタロギング」（二〇一六年度）の研究プロジェクトを実行し、本インタビューの遂行に関連して助成を得たことを付言する。

（ドマーニグ・シエアマン・上田）



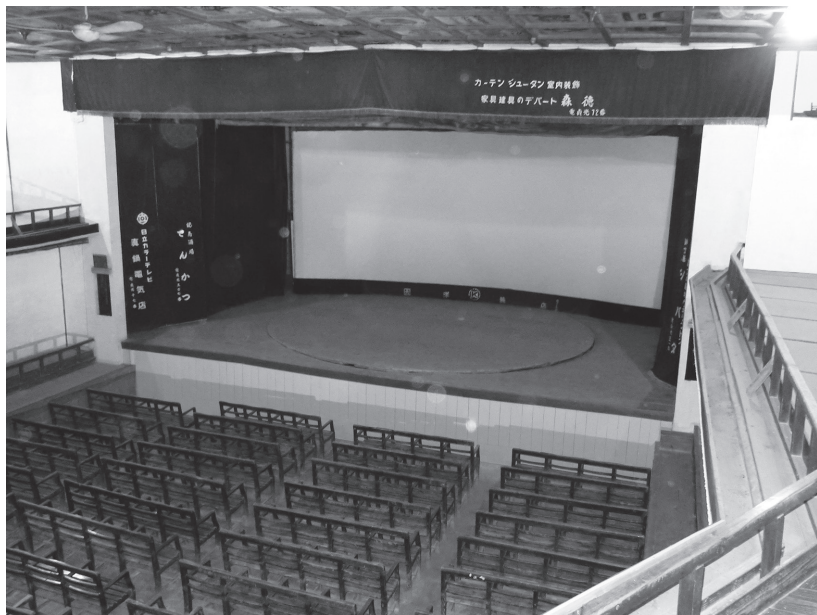
貞光劇場の外観



ロビー



藤本一三さん



劇場内、真中は回り舞台



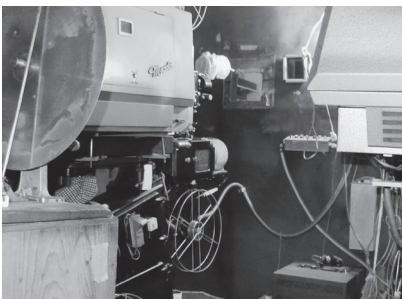
二階の畳席



一階の椅子席



劇場内の天井パネル



映写室